

これは、子どもさんというより、ぜひ大人の方々に読んでほしい絵本です。

6月のきらきら懇談会で担任が読み聞かせをしたところ、とても好評だったとのことでしたので、数年前の「からたち」でもご紹介しておりますが、この七夕の時期にあわせて、再度ご紹介したいと思います。

( くすのき しげのり・作 石井聖岳・絵 『おこだでませんように』 小学館 )

主人公は「ぼく」です。

ぼくは いつも おこられる。いえでも がっこうでも おこられる

「ぼく」には「ぼく」の言い分があります。怒られなくてやってるわけではないのに、やることなすこと怒られてしまうのです。



きのうも おこられたし……、きょうも おこられてる……。きっと あしたも おこられるやろ……。

だんだん、「ぼく」は自己嫌悪に陥っていきます。

ほんまは ぼく「ええこやねえ」って いわれたいんや。

この気持ちわかりますね～。本当は誰だって「良い子だね」って褒められたいはずですよ。

ぼくは どないしたら おこられへんのやろ。ぼくはどないしたら ほめてもらえるのやろ  
ぼくは…「わるいこ」なんやろか…。

そんなある日、「ぼく」は、学校で七夕の願い事を短冊に書きます。友達は「サッカー選手になれますように」とか「ピアノが じょうずに なりますように」と書くなが、「ぼく」は、一生懸命考えて、いちばんの願いを、ひらがなでひとつずつ、心を込めて書きます。

「おこだでませんように」(怒られませんか)

書き終わったのが最後だったので、またいつものように怒られると思ったのですが、先生はじっと「ぼく」の短冊を見ていました。そして、先生は泣きながら、

「せんせい……、おこってばかりやったんやね。……ごめんね。ようかけたねえ。ほんまに ええ おねがいやねえ」

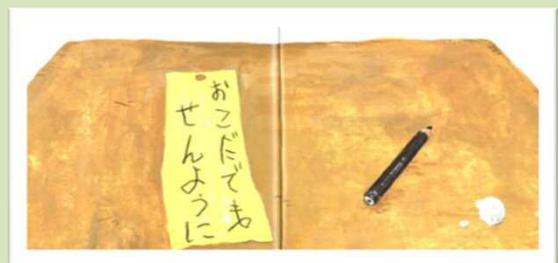
「ぼく」は驚きます。はじめて先生に褒められたからです。さっそく願い事がかなった！と喜びます。その日の夜、先生からお母さんに電話がありました。長い電話の後、お母さんは「ぼく」を抱っこして

「ごめんね、おかあちゃんも おこってばかりやったね」

と言いながらぎゅっと「ぼく」を抱きしめてくれます。

絵本の最後で、「ぼく」は、こういいます。

たなばたさま ありがとう。ほんまにありがとう。  
きょう、ぼくは ものすごくしあわせです。  
おれいに ぼく もっと もっと ええこになります。



今の日本の子どもたちは、世界中でもっとも、それも極度に「自己肯定感(自尊感情)」が低いといわれています。自分に自信がない。自分はダメな人間だと思ってしまう。自分のことが好きになれない。そんな子どもたちに育ててしまっているのは、すべて、私たち大人の責任です。もっと子どもが自分に自信を持って自分のことが好きになるように育ててあげなければならないのに。「この世は楽しいところだ。」「生きる価値があるところだ」と子どもたちが感じられるようなかわりを心がけていきたいですね。